

平成26年度 A 2

2

次の一と二の故事成語の使い方として最もふさわしいものを、1から3までの中からそれぞれ一つ選んで、その番号を書きましよう。

一 「五十歩百歩」

- 1 姉と私は、残りのケーキをどちらが食べるのかでもめていた。すると、母が私たちを注意して、もめごとに関係のない弟に食べさせた。弟にとっては、**五十歩百歩**だ。
- 2 私たちの学級では、学年で行われる学級対抗ドッジボール大会での優勝をめざして、ほかの学級よりもずっと前から練習を始めた。だから、優勝できたのは、**五十歩百歩**だ。
- 3 山口さんと川島さんが、学校で出された宿題を五回忘れたのか、六回忘れたのかで言い争っていた。このようなことと言い争う二人は、**五十歩百歩**だ。

二 「百聞は一見にしかず」

- 1 友達の野村さんは、先生の説明のはじめの部分を聞くと、**結論**まで見通すことができるという。**百聞は一見にしかず**ということが出来る人だ。
- 2 私は、夕日が美しいことで有名な海岸を訪れ、その美しさを自分の目で見て実感することができた。まさに**百聞は一見にしかず**だ。
- 3 私は、人からいろいろと細かく注意されることがいやだ。しかし、友達に**百聞は一見にしかず**だと助言されたので、そのことをよく考えてみようと思う。

解答らん

二                  一

平成26年度 A 2

2

次の一と二の故事成語の使い方として最もふさわしいものを、1から3までのの中からそれぞれ一つ選んで、その番号を書きましよう。

一 「五十歩百歩」

- 1 姉と私は、残りのケーキをどちらが食べるのかでもめていた。すると、母が私たちを注意して、もめごとに関係のない弟に食べさせた。弟にとっては、**五十歩百歩**だ。
- 2 私たちの学級では、学年で行われる学級対抗ドッジボール大会での優勝をめざして、ほかの学級よりもずっと前から練習を始めた。だから、優勝できたのは、**五十歩百歩**だ。
- 3 山口さんと川島さんが、学校で出された宿題を五回忘れたのか、六回忘れたのかで言い争っていた。このようなことと言い争う二人は、**五十歩百歩**だ。

二 「百聞は一見にしかず」

- 1 友達の野村さんは、先生の説明のはじめの部分を聞くと、**結論**まで見通すことができるという。**百聞は一見にしかず**ということが出来る人だ。
- 2 私は、夕日が美しいことで有名な海岸を訪れ、その美しさを自分の目で見て実感することができた。まさに**百聞は一見にしかず**だ。
- 3 私は、人からいろいろと細かく注意されることがいやだ。しかし、友達に**百聞は一見にしかず**だと助言されたので、そのことをよく考えてみようと思う。

解答らん

一  
3

二  
2